研修レポート

長野県栄村及び佐渡トキ保護センター研修

報告者　阿　部　栄　悦

長野県栄村

研修参加者　阿部　栄悦
見上　政子
腰山　良悦

平成25年7月26日午前9時、長野県栄村役場に入り、上倉議会事務局長の案内により二階の会議室に入った。

早速、島田茂樹村長、福原和人議長が大変忙しい中、私達を歓迎して下さり、それぞれ挨拶をいただいた。島田村長は、村の概略、当時の地震の状況、復興の課題、今取組んでいる事業などを説明してくれた。

栄村は、長野県の最北端に位置する271㎢の面積で、八峰町よりやや広い面積を要し、山林原野が93％を占める。北は千曲川が東西に、南は2000m級の山々が連なる山岳地帯で、全国有数の豪雪地としても知られ、人口2300人、900世帯の村である。

日本最高積雪地点（7m85㎝）の記録がある栄村の「森宮野原駅」

平成23年3月12日、午前3時59分、マグニチュード6・7の長野県北部地震が起きた。住家全壊33棟、半壊169棟、橋の崩落、道路決壊、農地被害832箇所、山崩れによるJR飯山線の損壊などすさまじい被害を受けた。秋山地区を除き、全域に避難指示を発令、村7箇所に避難所を設営し、村の8割に当たる1787人が避難され、大混乱の中、地区の区長さん達が中心となってまとめられたそうである。

避難生活のストレスによる災害関連死が3名おられたが、軽傷者10名と少なく、また火災が全く起きなかったことは、村の消防団が7箇所の避難所に分担して張り付き、住民の誘導、世話活動の他に、地震後すぐに一軒一軒住家をまわり、ブレーカー（電源）を切って、火災の予防に努めたとのこと、特筆すべきである。

災害後の避難所の様子は、水がなくトイレの処理に難儀されたそうである。突然の生活の変化について行けなく、避難所から抜け出すお年寄りもおり、探し出す仕事もあったとのことである。生活物資として精薄施設などから、手作りのパンが届けられたり、入浴サービスなど各方面より多くの支援を受けて、その善意が身にしみてありがたかったとのこと。

島田村長の説明

地震後の村の対応は、生活関連の窓口業務のみとし、役場機能の全てを地震対策、復興に取り組み、2年を経てやっと落ち着いてきたとの事である。平成25年3月までに届いた義援金が8億7400万円、寄付金2億3300万円であり、「結い」というボランティアが3900人いて、今も組織として続いている。各方面の視察も一切断っていたが、今ようやっと受け入れる体制になったそうだ。

栄村に「げたばきヘルパー」という組織がある。平年2～3mの積雪地にあり、山里に点在した集落で24時間ヘルパーが駆けつけ、安否の確認と介護ができる態勢づくりを期するもので、名前は近所、隣なら下駄を履いて、真夜中でも雪の中でも駆けつけられる、という事から名付けられた。31集落の有資格者の住民ヘルパーが村社会福祉協議会に登録し、村内集落を8地区に分け、ヘルパーによるワーキングチームを作り、24時間の介護を実現させるもので、住民パワーを持って住民による安心ネットワークで高齢者が住みなれた郷土で希望を抱き安心して暮らせる村づくりを目指すことから組織された。現在116名の登録者がおり、村全体で20名に1人の割合で存在する。

登録者から、説明を聞く

今、村では国からの復興予算もあって、18棟31戸の復興住宅が完成し、平成24年12月から入居を始めたとの事である。村の復興計画を策定し、「震災を乗り越え、集落に子どもの元気な声が響く村を」目標に、

① 暮らしの拠点・集落の復興・再生
② 農業を軸に資源を活かした新たな産業振興
③ 災害に強い道路ネットワークの構築

3つの基本方針のもと、道路や橋の復旧などダイナミックに事業を展開している。

村長始め、役場職員が一丸となって復興に取組んでおり、ヤル気の力強さを感じながら研修を終えた。

橋の復旧現場

翌27日は、栄村の研修を終え、次の研修地である佐渡島に渡り、「佐渡トキ保護センター」を視察、野生復帰のための訓練をしている状況を目の当たりにし、人と動物が共生する自然のあり方、大切さを感じて帰路についた。

佐渡トキ保護センター